荒国に蘭

亜薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
荒国に蘭

【Ｎコード】
Ｎ４１６２ＢＡ

【作者名】
亜薇

【あらすじ】
「何があろうと、私は逃げたくない。」比類なき神力と武才、絶世の美貌を与えられた少女麗蘭。孤児として育ちながらも、自分は人にはない特別な『宿命』があることを感じ取っていた――大国の侵略にあえぐ帝国の『皇女』であり、天帝に仕える『神巫女』でもある麗蘭が、己が使命に目覚め仲間と共に成長していく物語。【荒国に蘭】では、麗蘭は皇女という自分の身分を知らず、都を離れて山奥で暮らしている。世にも美しい邪神『黒龍』やその異母弟『邪龍』などの敵、仕えるべき天帝『聖龍』と出会い、戦いの道へ進む

決意を固めてゆく。（※作者サイト「楽園喪失」に載せたものに修正を加えたものです。）

序

其の昔
神々の王　天帝　聖龍神(せいりゅうしん)は
此の世に蔓延(はびこ)る数々の悪から力弱き人間を救うべく、
己の神力を与えて一人の女をお創りになった。
彼の女、名を　霜(そう)　奈雷(ならい)
清麗かつ聡明、偉大な神力を用いて妖を討つ
“神巫女(かみみこ)”“光龍(こうりゅう)”である彼の女は　死ぬ度に転生する魂を持つ。
五百年ごとに生を受ける光龍
大いなる力でその度使命を全うする。
奈雷没後千五百年、
新たな光龍――清(せい)　麗蘭(れいらん)
人界に再び下される。

◇

◇

◇

序

暗く、湿った洞穴の中。もう何百年も人々に忘れ去られた地である。

静寂が流れ、時折滴り落ちる水の音のみが鳴り響く。

…突如、そこに光の筋が現れた。

全てが静止しているその場所で、それは一際神々しく映る。

眩い程の光の洪水の向こうからまるで空間に浮き出るように、「彼」は静かに現れた。

細く滑らかな黒い髪にすらりとした体躯、黒曜石の如く輝く黒い双眸。一見女と見紛う、此の世のものとは思えぬ程の美貌。

「やっと、出て来られたか。」

その美しい声は、冷たい空気に乗って低く鳴り響く。

「…千五百年。恐らく未だその程度だろう。それにしては、随分長く待ったように感じるものだ。」

外套を翻し流れる長い髪を白い手で結い上げた彼は、ゆっくりと歩き出す。そして、側に倒れていた白刃の剣を拾いその刃に目を落とす…凍り付くような笑みを湛えたまま。

「兄上、こんな封では長く保(も)たぬと分かっていたであろうに。」

その笑みは、全てを呑み込む程深遠な、闇。

「…僕は僕の、『宿(しゅく)』を果たすとしよう。此の道を選び取ったのだから…」

降臨（前書き）

主人公、麗蘭誕生。

降臨

聖安帝国が北方、帝都紫瑤（しょう）の中央にある燈凰宮。
嵐…大雨と共に雷鳴が轟く日――聖安の第一皇女麗蘭が生を受けた。
此の帝国では特別な場合を除き、第一子が第一位の皇位継承権を持つ。ゆえに、此の麗蘭は生まれながらに女帝となる「宿」をもつ皇女だった。

「お生まれになられました。皇女さまでございます。」

赤子を取り上げた下女が嬉しそうに告げる。
皇女誕生の報を聞き付け、皇帝や控えていた十名程の臣たちが産室へとやって来る。
それは龍王朝と呼ばれた時代の、甬（よう）帝の治世二年目、盛夏の日。

「珍しい深紫の瞳。まるで玉のようではないか。」

年若い皇帝はたった今授かった娘を抱き、満面の笑みを零す。
命の力に満ちた産声を上げて、その姫は此の世に迎えられた。

「屹度（きっと）聖妃のように美しく、気高い女帝となるに違いない。」

未来の女帝となるその赤子を見て、聖妃の寝台から離れた位置に控えている臣下たちも嬉しそうに微笑んでいる。しかし、穏やかで幸せな時間は長く続かなかった。

「…陛下！　その御子の、左肩に…」

最初に気付いたのは、禁軍属の女将軍璋風友(ふうゆう)だった。

「…此れは、まさか…」

甬帝が言われた通りの場所を確認する。自らの腕の中にいる小さな娘の小さな肩に、確かにそれが在った。

「天帝聖龍神の御印…？」

――人界、天界、魔界。

此の天治界(てんちかい)全てを統治する神々の王、天帝聖龍神。

麗蘭の左肩にはその僕である証、白龍の印がはっきり表れていた。それが意味することは只一つ。彼女が神巫女「光龍」であるということ。

「光龍は五百年に一度人界に下されるといいます。では、此の姫が正しく…」

風友がそう言いかけた時。

「何ということ…！可哀相に…こんな時に…」

皇女の母、皇妃である聖妃は、半ば悲痛とも取れる面持ちで寝台から身を起こした。

本来ならば、世継ぎが神々に愛される神巫女であることに感謝し心より祝福したいところだが、今の此の国では難しいことだったのだ。

「此の御子を此のままにしておけば、珠玉が黙っていません。」

聖安は数年前より、東の大国茗(めい)帝国と戦争状態にあった。
茗の女帝である珠玉は、帝としても将としても大陸六国中にその名を知られた女傑。人界全統一という途方もない野心を抱き、一国一国兵を送り、戦争を起こして侵略を繰り返していた。

彼女は冷酷な悪女として、自らの野望のためには手段を選ばない女。神にも等しい力を持つ神巫女が生まれたと知れば、必ず利用しようと手を打ってくるだろう。

聖安は六国の中でも決して弱い国ではなかったが、十数年前王朝が交代したばかりで国内の混乱が続き、更に年若い甬帝と聖妃の統治も日が浅く真っ先に珠玉の標的となっていたのだ。

「どうしたものか、聖妃よ…」

麗蘭、と名付けられた小さな姫は、何時の間にか眠っている。彼女を見守る父や母、そしてその場に集った忠臣たちの心配など何も知らぬまま。
聖妃はその安らかな娘の顔を見てから、目を逸らす。

「陛下、隠しましょう、此の姫を。」
「…何？」

甬帝だけではない、その場に居合わせた重臣の誰もが、自分の耳を疑った。

「…風友。」
「此処に。」

聖妃の呼びかけに答え、女将軍は前に出る。

「此の子を此処から連れ出し、武の術や知恵を授けて下さい。」

「聖妃、何という…」

「無謀、とは承知。けれど、此のまま此処で成長すればほぼ間違いなく珠帝の知ることとなり、奪い去られかねません。」

珠玉は、自分より上のものを認めない。支配下に置くことが出来なければ、麗蘭に危険が及ぶことは必至だった。

「神巫女をお守りするだけでなく、わたくしたちには娘を守る義務があります。」

「陛下…」

聖妃は揺るがず、風友を見上げる。

「麗蘭には、何者にも屈することのない強い子に育って欲しい。」

周囲は沈黙を守っている。聖妃の固い決意の眼差しに、甬帝は重々しく頷いた。

「…わかった、そうすることとしよう…引き受けてくれるな？璋将軍。」

「…御意。及ばずながら力を尽くします。」

その言葉を確かに聞くと、甬帝は重臣たちに向って告げた。

「皆、聞け。世継ぎの皇女『麗蘭』は、　時が来るまで璋将軍のもとに預けられ、一平民として育てられる。本日皇女が生まれたこと

は、　此処にいる者のみ知るものとし、　口外した者は厳罰に処する。」

甬帝の言葉通り、麗蘭の誕生は隠された。皇宮中、そして国中に、第一皇女が死産したという報が伝えられる。

国中が悲しみに暮れる中、麗蘭は秘かに「宿」を以て下されたのだ。

遡遡《1》（前書き）

麗蘭7歳。
これで7歳？という感じですが…

邂逅《1》

かくして第一皇女麗蘭を託された風友は、将軍を辞し帝都を離れ、帝国の南方に位置する阿宋山（あそうざん）で小さな“孤校（ここう）”を開いた。

“孤校”とは、身寄りのない子供たちを集め住まわせ、学問を教える場所である。

麗蘭はいずれ帝都に戻り、皇位を次いで女帝となる身。彼女を預かり育てるには、他の臣下に示しをつけるため風友が将軍で居続けるわけにはいかなかったのだ。

あの、嵐の日から七年。

麗蘭は風友と共に、十数人の孤児達と暮らしていた。

自分が皇女であるを知らず

神巫女「光龍」であるを知らず――

◇　◇　◇

「お早うございます、風友さま。」

「お早う。」

風友はその長い髪を後ろで束ねて背に流し、静かに畳の上に正座

している。麗蘭も師に向かい合って腰を下ろした。
聖安禁軍にその人ありと言われ、甬帝や聖妃の厚い信頼を得ていた風友は現役を退いて久しい。しかし未だ三〇代半ばと歳若く、孤校で子供たちを育てながらもかつての同胞たちと連絡を取り、激しさを増していく茗との戦いで少しでも故国の力になるべく動いていた。
少女の頃から軍人として活躍してきただけあり、ぴんと伸びた背筋や所作から厳しく引き締まった美しさが垣間見える。落ち着いた雰囲気や表情、身のこなしが彼女を実年齢よりもやや上に見せていた。

「昨日、琿加(ぐんか)将軍にお会いしたよ。またお前の弓を褒めていた。」
「左様ですか、嬉しゅうございます。」

麗蘭はほんの少し、頬を赤く染めながらもはきはきと応える。それはまるで、嬉しさを押し隠しているかのような微笑ましい様子だった。
珍しい太陽色の髪を高く結い、長い睫毛に縁取られた瞳の色は深い紫。形の良い鼻に柔らかそうな唇、薔薇色の頬。麗蘭は、正しく神に愛される巫女と呼ばれるに相応しい、美しい少女に成長していた。
年のわりに大人びてしっかりした顔付きに、真っ直ぐ背を伸ばした凛とした姿。幼くして、他の子供たちとは違う高貴な品格を兼ね備えていた。

孤校の子供たちは、毎朝主室で揃って朝餉を取る。風友に学問を教わるのも主に此処だ。
子供たちが楽しそうにお喋りをしている中で、麗蘭はたった一人いつも輪に入らずにいた。

「また麗蘭が風友さまに褒められている。」

此処にいる子供たちは、ほとんどが麗蘭よりも年上の子ばかり。学問も武芸も、他のどの者よりも抜きん出て優れている麗蘭は、そんな彼らに妬まれ敬遠されていた。

無論、風友が麗蘭を贔屓目に見ていたわけではない。彼女の才は紛れもなく本物であるということと、子供たちが麗蘭に偏見を持ち、それを疑わなかった所為である。

風友は何かと麗蘭が孤立しているのに気付いていた。しかし、敢えて何も言おうとはせず見守っているだけだった。

「麗蘭、食事が終わったら外に薪を取りに行ってくれないか？」

「わかりました。」

いつものように静かに朝食を取り終わると、麗蘭は席を立った。

◇　◇　◇

麗蘭は、風友の言い付け通り薪を抱えて蔵を出た。

近頃森にはよく魔物が出るようになった。子供たちは「自分たちだけで孤校の外を歩き回るな。」と風友に言い聞かせられている。

しかし麗蘭は違った。既に彼女は、自分の身を守る術を身に付けている。

物心付いた頃から、麗蘭は自分が他の子供とは違うことに気付いていた。皆が感じ取れないものを感じ取ることができ、誰よりも弓、

剣で優れ、誰よりも学問が良くできた。

そして、何より彼女は知っていた。

自分には何か、やらなければならないことがあると。

誰に教えられたわけでもない。ただただ知っていた。自分は何か、特別な「宿」を持って生まれて来たのだと。

子供たちは皆麗蘭を遠ざける。麗蘭も、自分は彼らと相容れないと思っている。

――皆と自分が違うのならば、自分は何のためにいるのだろう？何をすればいいのだろう？

彼女はいつもそのことばかり考えていた。

そしてそれを、育ての親である風友にすら話せずにいる。

「雲行きが怪しい…早く帰ろう。」

麗蘭は薪を抱えたまま山道を駆け上がる。

雲行きだけではなかった。

麗蘭は、森の様子がいつもと違うことに気付き始めていた。

突然、ぴたりと足を止めて振り返る。何か、暗く気味の悪いものを感じたのだ。

それは優れた神人（かみひと）でなければ感じ取れない邪悪の気。

神人とは神力を備えた人間のことで、稀に生まれる貴重な存在である。風友や麗蘭、聖妃も此れにあたる。

麗蘭は薪を道の横に置き、背負っていた弓と矢を手にした。
がさがさと、物音がする…近付いて来る。
そしてその邪気は、一つから二つ、三つ、四つに分かれていく。
やがて、邪気はその正体を現した。
黒い鬣、大きな狼のような異形が真赤な目をかっと見開いている。
それが廰蠱（ちょうこ）という妖だと彼女にはわかった。
未だかつてその魔物を直接目にしたことはなかったが、風友から学んだ妖怪の知識、そして此れまで感じた事のない程の邪気から彼女はそう判断したのだ。
――何故、こんな所に廰蠱が？
妖の中でも強い妖気を持つ此の異形が四頭も。此の状況は稀というより異常だった。
彼女の記憶によると、廰蠱は魔界の妖怪で人界に出ることはないはずだ。
麗蘭は後退（あとずさ）りする。一人で、弓矢だけという装備で、相手に出来るとはとても思えない。
そうしている間にも、化け物はじりじりと麗蘭を追い詰める。しかし、彼女は悲鳴一つ上げない。彼女は知っていたのだ、此処で動じれば、その瞬間自分は化け物に喰われると。
麗蘭は意を決し弓を構える。そして、大きく息を吐いた。
「…来い！」
凛然とした彼女の声に応えるかのように、四つの黒い塊が彼女に

襲い掛かる。
鋭い爪を剥き出しにして、一足飛びで向かって来る。あの爪にやられては一溜まりもないだろう。

麗蘭は狙いを定めて弓を引く。その矢は見事に命中し、一頭の片目を射抜く。射抜かれた一頭は、堪らず森の奥へ消えて行く。
麗蘭の矢尻には、妖怪が嫌う「呪（しゅ）」をかけてある。ゆえに、急所に当てれば一本でも効果を発揮するのだ。
残りの背後からの二頭、正面からの一頭の爪を避け、今度は化け物の後方から引く。
一頭の頭に命中したが、射られた廰蠱は倒れる寸前麗蘭の背中を引き裂いた。

「くっ…！」

背中に熱が集中して行くのが分かる。感覚が麻痺しそうになる程の、じんじんとした激痛が走る。
反射的に右手を翳し、攻撃の呪を唱える。すると眩い光が放たれ、神力で残りの廰蠱が吹き飛ばされた。
しかしそれは時間稼ぎに過ぎない。此の一撃でかなりの体力を消耗してしまった。

小さな身体に大きな傷、流れていく血。立っているのがやっとで、痛みに耐えるのがやっと。
体勢を立て直し再び向かって来る化け物に、弓を構えるのが遅れる。麗蘭は瞬間、諦めかけた。

「麗蘭！！」

聞き覚えのある声が森中に、響く。

…風友の声だ。

走って駆け付けた風友は抜剣して二度大きく振り、二頭の化け物をばっさりと斬る。

赤い血を上げ、断末の呻き声を上げながら倒れた怪物は直に動かなくなっていた。

「風友…さま…」

安心した途端、麗蘭の身体を支えていた緊張が一気に解ける。

化け物の姿、風友の姿がだんだん揺らいで、見えなくなってゆく。

――血が流れすぎた。死ぬのか？此処で…こんな所で…！！

「麗蘭、しっかりしなさい！麗蘭！！」

風友の声が小さくなっていく。

彼女の姿、周囲の景色…何もかもが、視界から消えていった。

遐逅《1》（後書き）

次回、登場です。

遡遡《2》（前書き）

作者が大贔屓のあのお方が登場。

邂逅《2》

寒くて、暗い。
そして恐ろしい。

――此処は何処？誰もいない。私一人だけ…？
違う。誰か…誰かの声がする。

「麗蘭。」

低い、大人の男の声だった。

「お前は…誰だ？」

視界を覆い隠す暗闇で、男の姿を確認することはできない。
彼女の問いかけには答えずに、彼の次の言葉が飛んでくる。

「…やっと、見つけた。幾万幾千の夜を越えて、漸く会えた。」

「誰だ？そこにいるのは…」

次の瞬間、闇が晴れ、視界が開けていく。見たこともない光景が目の前に広がっていく。
見慣れた阿宋山の森ではない。薄暗く、動物達はおろか、風の吹く気配すら感じられない静寂とした森。
…現れたのは、一人の男。黒の双眸に高く結い上げた長い黒の髪。

その異様な“気”で、麗蘭には彼が人ではないことが判る。
足音も立てずに彼は麗蘭に近付いていく。近くで見ることでより彼の「異質」に気付く。
麗蘭の目の前まで来ると、彼はその美しい貌に穏やかな笑みを浮かべた。

「僕は、いと高き叛逆者。」

彼の言葉で、麗蘭はそれが意味するものをすぐ理解出来た。
天帝聖龍神が統治する此の天治界において、「いと高き叛逆者」が示す者はたった一人。

「黒(こく)…龍(りゅう)…？」

それは、古くから伝わる黒の神の名。
幾百の神々が存在するという此の世界で、黒い髪、黒い瞳をもつ神は黒神(こくじん)しかいないという。
黒龍神(こくりゅうしん)は、静かに微笑んだまま。その黒曜石のような深い瞳に惹きつけられて、吸い込まれそうになる。

――なぜ、こんなに悲しい目をしているのだろう？

「君は、いずれ知ることになる。君は一体何者なのか、何処から来て何処へ行くのか…君の『宿』は何なのか。」

宿。それは、全ての人間が神々に与えられた、今生で為すべき使命のこと。

「君は此れから、長い長い旅路をゆかねばならない…君は普通の人間とは違う。それは分かっているね？」

麗蘭は頷く。

「君の宿は魂に刻まれている。君の魂は、死んでも再び転生し、神々のため、人間のために、人界の悪を滅ぼすために戦い続ける…君は『光龍』。『神巫女』という名の、神の傀儡。」

彼女には、此の神が何を言っているのか、直ぐには理解出来なかった。

「安穏は許されない。君は此の先、その女の身で果てのない試練に挑まなければならない…しかし、逃げることは可能だ。君は選択することが出来る。」

「…逃げる？」

麗蘭は此れまでずっと、自分が与えられた「宿」は何なのか、答を求め続けてきた。自分が為すべきことは何なのか、探し続けていた。

「逃げるか、戦いの道へ入るか二つに一つ。君は選なければならない。」

ほとんど間を空けず、考えることも無く…自分でも不思議な位、自然に麗蘭は首を横に振っていた。

「何があろうと、私は逃げたくない。」

黒龍神の言うことは、完全には解らないけれど。
兎に角、自分は逃げたくない。只それだけだった。

彼女の一片の迷いもない強い言葉を聞いて、黒龍神は再び微笑んだ。

「…それもいい。では今此の瞬間から、僕と君は敵同士…次に見(まみ)える時は、君は僕に敵意を抱いているだろう。」

黒い神は、踵を返して歩き出す。そしてその姿を再び森の深くへと消してゆく。

「また、会おう。その日まで『宿』の通り己を貫き、戦い続けることが出来るかどうか…楽しみにしているよ。」

彼の姿が見えなくなると、再び辺りが暗くなっていく。何も見えなくなっていく――

遡遡《3》（前書き）

明かされる真実。

邂逅《3》

「…麗蘭！麗蘭！！」

心配そうに麗蘭を覗き込んでいたのは風友だった。麗蘭はゆっくりと、元の世界へ引き戻されていく。

「風友さま…？」

そこはまだ森の中だった。背中が酷く痛み、動けない。

「お前は本当に無茶をするな。」

半ば呆れ、半ば安心したような風友の声。序々に記憶が蘇ってくる…自分は化け物と戦っていたはずだった。

「私は確か、廰蠱と戦っていて…」

風友が頷く。

「…危ない所を、風友さまに助けて頂いて…」

「それから、暫らく気を失っていたのだ。」

師の言葉でおぼろげだったものを思い出し、溜め息をつく。どうやら自分は何とか助かったようだ。

「…ありがとうございます。それと…申し訳ありません。」

己の力を過信して危険に飛び込んで入ってはならない。麗蘭は常々そう言い聞かせられていた。
あの時も、戦おうとせずに廰蠱たちの注意を逸らし、孤校に戻って風友に助けを求めることも出来たはずだ。
しかし、そう出来なかったのにも訳があった。

「…解っている。孤校に戻れば、他の子供に危害が及ぶかもしれぬ。麓まで走れば、民家が襲われるかもしれぬ…そう思ったのだろう？」

麗蘭は頷いた。風友は、どうして何でもお見通しなのだろうか。

「しかし何故廰蠱が現れたのか、見当がつかぬ。あれは人界には出ないと言われているし、魔界でもそうは見られないらしい。私は魔界に数度行ったことがあるが…実際に見たことはなかった。」

普通の人間が、別世界である「魔界」に関わることはほとんどない。しかし、聖安帝国は魔界の魔族たちと同盟関係にあったため、風友は仕事で何度か訪れたことがあった。
…そう、廰蠱は人界に出たりしない。だとすれば、一つしか考えられない。

「…黒龍神が差し向けたのです。」
「黒龍神？」

突然その名を聞いて、風友は瞠目した。人間たちにとって「神」という存在は、神話や伝説の中だけの存在だったのだ。

「…私にも、良く解りませぬ。　ただそう名乗っておりましたし、気配も人間のものではなく…言い伝えの通り黒い髪に黒い瞳でした。そういう特徴の神は、黒神しか存在しないのでしょう？」

此の世界には、とある言い伝えがある。誰もが知っている銀神と黒神の神話だ。

…此の世は、三つの世界に分かれている。
人間が住む人界、魔族が住む魔界、そして神々が住まう天界。

幾百の神々の中でも、頂点に君臨する王を天帝と呼ぶ。かつて天地を開闢し、神、人、魔族その他全ての生き物を創った最初の天帝は「神王(しんおう)」。

神王には、双子の天子がいた。一人は、次代の天帝となるべく生まれた兄。そしてもう一人は、此の世を崩壊させるべく生まれた弟。神王は、兄に聖龍、弟に黒龍という“神名(しんめい)”を与える。“神名”とは、神格を表す神の称号である。

今から数えて約一五〇〇年の昔。彼ら双神によって、力の弱い人間たちを救い、守る使命を下された人間が“神巫女”である。聖龍神は「光龍」を、黒龍神は「闇龍(やみりゅう)」を創り、人界に遣わした。

その後乱心した黒龍神は、天宮で反乱を起こし自ら父神王を弑逆した。此れを“天宮の戮(てんきゅうのりく)”と呼ぶ。

聖龍神は、黒龍神と対峙し剣を交えて戦った。黒龍神は敗れ地に堕とされ、人界に封印される。その後聖龍神は、弑された神王を継ぎ天帝と為ったという。

「…会ったのか？黒龍神に。」
「はい…確かに、私が“光龍”だと言いました。」

こんなことを言えば風友は驚くに違いない、そう思っていた。しかし、風友は腕を組み考え込むだけだった。

「驚かないのですか？」

「驚くも何も…黒龍神までもが現れたなら、本当なのだろう。」

やはりそうかという口振りだった。

「風友さまは、ご存じだったのですか？　私が光龍だと…」

風友は頷く。

「…お前には、龍の印がある。」

麗蘭は光龍。それが、風友が麗蘭を預かった理由でもあったのだ。しかし、まだ全てを話すわけにはいかなかった。麗蘭が聖安の皇女であり、敵国にその力を利用させないため、こうして隠されていることは。

寧ろ、風友は麗蘭の反応が意外だった。

「お前も、余り驚いていないようだな。」

「…私は他の皆とは違う、薄々感じていましたゆえ…」

此れまで風友が麗蘭に「光龍」の真実を明かしていなかったのは、それが余りに重い「宿」であるがゆえに、幼い麗蘭が受け止められるか否か不安があったからだった。しかし麗蘭の此の反応を見て、風友は自分の弟子が思ったよりもずっと大人で、自分の力の大きさや特殊性を良く把握しているのだと気付き、改めて感心させられた。

「して、黒龍神と話したのだな？」
「はい。光龍としての宿を捨てるか戦う道を行くか、選べと。」
光龍である麗蘭の最大の使命は、悪である黒龍神を斃すこと。
「それで、どうしたのだ。」
「無論、私は宿を捨てなどしません。」
さほど心配していたわけではないが、風友は肩を撫で下ろす。
「私は何があろうと、自分の宿命から逃げたくありません。　私には皆にはない力がある。　私はそれで使命を果たしたい。」
麗蘭の瞳は、強かった。風友をじっと見詰めて揺らがない。麗蘭を守ってくれと風友に頼んだ、あの時の聖妃の瞳にとても良く似ていた。
「…言い伝えによると、黒龍神は一五〇〇年もの間封じられていたはず。お前の前に現れたということは…封印が解けたのだな。」
「恐らく。」
神話では、一五〇〇年前黒龍神を斃そうとした時の光龍は彼に敗れ、命を落としたと言われている。
此の先、麗蘭が本当に黒龍神と対峙する時が来るなら、本当に勝てるのだろうか？　麗蘭を大事に思うがゆえに、それを思うと胸が痛む。
不安な気持ちを胸に抑え、やがて風友は優しく微笑んだ。
「…では此れから、一層腕を磨かねばな。私の手等借りなくても良

い位、お前は強く為る。まずは私を追い越せ。」

そう言って、麗蘭の頭を撫でる。

「…はい！」

ずっと探し求めていた自分の宿命。黒神が示唆したように、その宿の重みに負けそうになる時が来るかもしれない。しかし、麗蘭は力強く応える…逃げない、逃げたくない。そう思えたから。

風友もまた、此の我が娘同然の弟子を、何処までも信じ抜き支えていこうと誓うのだった。

遡逅《3》（後書き）

次回、また動きます。

邂逅《4》（前書き）

麗蘭の妹姫、蘭麗登場。

邂逅《4》

風友や麗蘭が都を離れている間、聖安帝国と茗帝国の戦争は激化していた。

甬帝治政下九年の冬。聖安帝国領地の岱銅(だいどう)にて、麗蘭の父甬帝崩御。戦死であった。

茗軍は聖安の各軍拠点に兵を進め制圧を続けている。残された聖妃は侵略を食い止めるため、夫の死を悼む暇もなく休むことなく動いていた。

そして、追い打ちをかけるように悲劇が起こる。

「陛下！大変でございます！！」

「どうしたのですか？」

聖妃は疲れ切っていた。日に日に痩せ細ってゆき、白磁の肌が益々白くなっている。聖安一の美女と謳われ、褒め称(そや)されたその美貌は此処数週間の激務のために翳(かげ)ってしまっていた。

戦況は悪くなる一方で、夫までも亡くした。慈悲深く聡明で優れた皇妃と民にも臣にも慕われた彼女も、体力的にも精神的にも限界が近付いていた。それでも、決して臣には疲労の色を見せようとしない。

「蒼桐(そうとう)宮に隠れていらっしゃった、蘭麗(らんれい)姫が…」

使者の言葉に聖妃の顔が蒼白になっていく。

「蘭麗が…どうしたのです？」

普段の皇妃らしくない動揺振りに、使者は堪らず目を逸らしてしまう。

「珠帝の人質となられました…」

「蘭麗が、捕えられた…」

余りの衝撃に思わず、傍にあった長椅子に座りこんでしまった。

――恐れていたことが、現実になってしまった。

皇女蘭麗とは、麗蘭が生まれた一年後に誕生した皇女で、麗蘭の代わりに皇位継承者として育てられていた。

事情を知る者には、麗蘭を隠し通すための囮だ等と批判もされた。それでも聖妃や甬帝にとっては、唯一自らの手の中に残された宝だったのだ。

「珠帝自ら、蒼桐宮を占拠しています…陛下がお出でになるよう要求しています。」

「行きます。馬車を出しなさい。」

聖妃は間髪入れずに命じた。自らを奮い立たせるように、厳しく険しい声色だった。

主の痛みを受け取ったのか、使者は必死に訴えかける。

「…恐れながら、罠です。どうか…」

「解っています。兎に角早くなさい。」

有無を言わせなかった。平生は穏やかで臣下達にも優しげに接する彼女らしからぬ物言いだったが、今はそれどころではない。

聖妃を乗せた馬車は、蒼桐宮へと一気に駆け抜ける。

蒼桐宮は帝都紫瑤（しよう）の郊外南に位置する古い城で、蘭麗はそこに隠れていた。既に茗帝国軍は、紫瑤に入り込んで来る程侵略を進めていたのだ。

更に蘭麗の居場所が知られる程、情報が漏れている。不利になる一方の状況に、問題が山積みだった。

しかし今の聖妃には、蘭麗の無事を祈る気持ちしかなかった。

◇　◇　◇

「陛下、聖妃さまがお見えです。」

「…お通ししろ、丁重にな。」

珠玉（しゅぎょく）――長い髪を束ね、真赤な鎧に身を包んだその姿。真赤な瞳には、果てのない野望を秘めている。正に、女傑と呼ばれるに相応しい風貌だ。

珠玉は氏を赤（せき）といい、茗帝国の名門の生まれで強力な神人でもある。代々将軍を出す家柄の出身で、自身も武の達人である。

皇太子と婚姻して、彼が皇位についてすぐ彼を暗殺。様々な策を用いて遂には自ら女帝となった。

暫らくして、聖妃がやってくる。傍らに護衛を二人付けているだけのようで、敵陣に入って行く君主としてはそれらしくない防備だった。

「よく、お出でになられた。お掛け下さい。」

聖妃は冷静な面持ちで椅子に掛ける。使者から報告を聞き、動揺していたつい先刻とは打って変わっていた。何が有ろうと、珠玉の面前で取り乱すわけにはいかない。

此の二人が会うのは初めてではなかった。確か甬帝が帝位についた時、まだ戦争が始まっていない時、珠玉が聖安に来賓として招かれていたのだ。

「珠帝、貴女は何をお望みですか？」

単刀直入に切り出す聖妃。

「流石は聖妃さま。察しがよろしゅうございますな…皇女を連れて参れ。」

珠玉に命じられ、控えていた兵が蘭麗を連れてきた。

「蘭麗…！」

蘭麗は今年六つになる。茶色の長い髪を下ろし、透き通る水のような色の瞳をした、聖妃に良く似た顔立ちの姫だった。

逃げられないよう二人の兵に挟まれ怯えていてもおかしくない状況の中、毅然とした態度を取っている。

「…良い姫だ。此の姫を、此のまま帰すのは実に惜しくてな。」

珠帝は蘭麗に目をやりくっくっと笑う。そして聖妃に向き直った。

「聖妃さま、此の通り皇女は無事。だが今は我らが捕えた捕虜。此のまま帰すわけにはいかぬ。」

蘭麗は母をずっと見ている。母の出方を見ているようだ。

「そこで…交換条件だ。妾(わらわ)は貴国と和平を結びたい。此の皇女の身柄を預かる代わりに、我が国は今後貴国を攻撃しないと約束する。」

「…」

予想していた範囲内の、条件だった。此れは「和平」ではない。思った以上に戦いが長期化したこともあり、流石の大国茗も此れ以上続けていくのは危険を伴う。そこで一旦戦争を中断させようという魂胆なのだろう。　蘭麗を人質に捕れば、侵略せずとも聖安を従わせるには十分過ぎる。

「…身柄を預かるということは、　皇女を茗へ連れ行き幽閉するということですか？」

「どう捉えるかは、貴女次第だ。」

聖妃は蘭麗を見る。蘭麗は頭が良く、幼いながらに自分が置かれている立場を良く解している。何も言わず、母に判断を任せようとしていた。

決断を迫られる。娘を宿敵に差し出すか、国を治める者としての責務を果たすべきか。

「どうなされた？　貴国にとってもそれが最良であろう。」

此処で申し出を断れば、戦争は続く。そして、今のままでは確実に負ける。

暫し沈思した後、聖妃は重い口を開いた。

「和平条約を結び、我が皇女をその証として差し出しましょう。」

その言葉に、珠玉は満足そうに微笑む。

蘭麗は暫らく母の方を見ていたが、やがて何も言わぬまま視線を落とした。一方で聖妃は、珠玉に是という答えを出した後どうしても蘭麗の顔を見ることが出来なかった。

「…聖安は良い皇后陛下をお持ちだ。そうであろう？蘭麗。」

こうして、蘭麗は茗帝国の皇宮深くに幽閉され、長年続いてきた戦争は、和平という形で中断されたのだった。

遐逅《4》（後書き）

次回、天界側が動きます。

遡遡《5》（前書き）

黒龍と兄上。

邂逅《5》

天界――

そこは、人界や魔界の上に位置する、神々の住まう至高の地。中央の天山（てんざん）に、天帝の住まう壮麗な陽凰宮（ようおうきゅう）が在った。

「天帝陛下！」

高い高い玉座に、天帝聖龍神が居た。彼は此の世を創造した故君神王の天子で、邪神となった弟黒龍を封じ、天帝を継いだ。

銀糸の髪に淡く青い瞳。美しい容貌はその色を除いて黒龍神と同じ。

「黒神をお討ち下さい！奴の非道を見過ごすわけには参りません。」

何処からともなく現れた黒神復活の噂は、瞬く間に天界中に広まっていた。神々にとって、黒龍の存在は脅威。一五〇〇年前の“天宮の戮”では、立ちはだかる闘神を次々と血祭りに上げ、あっという間に神王の首級を上げた。

その時の彼は、正しく“魔神”。止められたのは、双子の兄である聖龍神だけだった。

彼が施した封印の神術が解けた今、一五〇〇年前天界の神々を震え上がらせた恐怖が、再び天治界を震撼させようとしている。

「聞けば、あの？明神殿（せいめいしん）も黒龍討伐に赴き帰らないとか。」

「あれから奴の力は更に巨大に為ったと聞き及びます。　もし、此の天界にまた現われでもしたら…」
「今度こそ、奴を討たねばなりません。あのような残虐な殺戮を繰り返させる前に…我々は陛下だけが頼りなのです。」

神々は次々に聖龍神に懇願した。それらを聞いていた聖龍は何も言わず、ただ玉座の下の神々を見下ろしているだけである。

ここ数年の間に、何十人かの闘神たちが名乗りを上げ、黒龍討伐に向かっている。しかし帰ってきた者は誰一人としていなかった。一人、また一人と黒龍の下に向う度に神気を消していく…つまりそれは、一人残らず殺され消滅させられたということを意味していた。その度神々の恐怖は増していき、次第に名乗りを上げる者も居なくなっていた。
天界最強の闘神と称された?明神が敗れたとされてからは、誰一人として黒龍の元に向かっていない。

「陛下、何とぞ、再び御自ら奴をお討ちください！どうか…」

ある神がそう言いかけた、その時だった。

「それは無用な心配だ。今からおまえたちは死に逝くのだから。」

その場にいた誰もが聞き覚えのある低い声が、静かに響いた。一瞬にして辺りが静まり返る。そして突然、広間中が白い光に包まれた。

少しして、徐々に光が消えていく。すると、それまでそこに立っていたはずの神々が血を上げて倒れていた。どの死体も四肢を裂かれ、辺りに転がっている…自分が死ぬことにすら気付かなかっただ

ろう。

死体の中心に、彼は居た。玉座の下から聖龍を見上げて、右手に白く輝く剣を持っている。

「…此処に来るのも久しいな。最後に来たのは…神王を弑し奉り、貴方と剣を交えた時か。」

黒龍神は、足元に転がる死体を踏み付けながら階段を上り始めた。

「兄上、お久しゅうございます。『鵺』はたった今、御元に。」

玉座の兄の元まで来ると、そっとその手に触れる。聖龍神は、何も言わずに弟の目を見ている。

「…一五〇〇年振りにお会いするというのに、此の弟に何の言葉もかけて下さらぬのか。『黒龍』には言葉をかけることすら憚られますか？」

黒龍は笑んでいる。しかしその目は笑っていない。そして兄から手を放す。

「此の玉座を手に入れられたのも、私のお陰だというのに…闘神を差し向けて、殺そうとさえなされた。無駄だと解っておいででしょうに…何時の間にやら貴方も神王と似てこられたようだ、失望しましたよ。」

言葉とは裏腹に、彼の表情に沈んでいる様子など微塵も無い。

「まあ、たとえ貴方が止めても聞き入れるような連中ではなかった

でしょうからねえ。随分と沢山私の所に来たものだから、何人殺したか覚えていないのですが…貴方の本意では無かったのでしょう？」

兄の真意や事情など解りきっているというように、嗤っている。

「…お前は、此の玉座が欲しいのか？」

漸く、聖龍は口を開く。険しい面持ちは崩していない。

「ふ…ふ。違うな。私は此の世界等、『天』も『地』も要らぬ。」

その笑みは、凍り付く様に静かで美しい笑み。

「私が欲するのは、血の賛美と生ける者の慟哭。」

黒龍神は、兄の足元に手にしていた剣を立てる。それは、黒龍を封じ込めていた兄の剣『瑞奘（すいじょう）』。

「私は、神王と貴方が創り上げて来た此の世界が滅びゆく様を見たい。」

聖龍が立ち上がる。剣を取り、その切っ先を真っ直ぐ弟に向ける。

「お前がそれを望むというなら、私は再び、お前を止めねばならない。」

黒龍神はそれを見て、一層嘲笑った。

「兄上、私を見縊（みくび）るな。貴方の神力が弱まり、新たな光龍が生まれても人界に降りられなかったことは分かっている…現に、先刻の奴

等のように…怯える憐れな神々の嘆願を聞き入れ、自ら私を討ちに来ることも出来なかったのでしょう？一方、私の力は封じられている間にも増し続けた…今闘えば、私は貴方を確実に殺せる。」

彼の言うことは真実だった。自分よりも神力の強い黒龍を封じ込め、長い長い間抑え込んでいたために、聖龍の力は以前と比べて甚だしく衰えている。

「私は悟ったのです。私の甘さが…私の弱さが、私に全てを失わせた。再び手にした此の力で、もう二度と…何も奪わせはしない。だから、今の私は誰でも殺せる…」

聖龍は剣を下ろした。

「『黒龍』、耀蕎（ようきょう）を殺したのは…お前だな？」

天宮の戮で唯一生き残った、五大闘神最強の？明神耀蕎。彼女は自ら黒龍討伐に志願し、聖龍がそれを許した。しかし彼女は戻って来なかった。そして彼女の神気が消え去ったことが、彼女が消滅した事実を示していた。

「…私は一五〇〇年前、あの奈雷ですら殺したのです。驚くことでもないでしょう？」

大したことはない、何ということでもない、そんな口振り。聖龍は唇を噛む。

「…お珍しい、怒っておられるのですか？そんなに耀蕎が大切なら、何故無理にでもお止めにならなかったのです？私が彼女だからといって見逃すとでもお思いだったのなら…大きな過ちというものです。

」

黒龍の言葉に聖龍は首を横に振った。

「…違う。私には解っていた。お前が彼女を殺すであろうと…にも関わらず彼女を行かせた。彼女を死なせたのは、私の罪だ。」

再び、弟を見据える。

「そして…お前をそんなお前にしてしまったのも…な。」

暫し、二人の間に沈黙が流れる。聖龍は黒龍から目を逸らさず、黒龍は言葉を発しないまま、相変わらず笑んでいる。

やがて黒龍は、玉座の右側に少し離れた所にある台座に目をやる。

「…“淵霧(えんぶ)”か。やはり貴方が持っていて下さったのですね、兄上。」

兄から離れ、黒龍は黒い神剣の下へとゆっくり歩いていく。彼がその剣に手を掛け強く握ると、呼応するように柄から刃、切っ先まで黒い電撃が走った。

そのまま剣を台座から引き抜くと、黒く滑らかな刀身を顔の側に持ってゆき、見詰める。

「神王に頂いた大切な剣…懐かしい、一五〇〇年前の血の香りと神々の慟哭が甦って来るかのようだ。」

黒龍は呟くように言うと剣を下ろし、再び兄の方を向く。

「今日は兄上へのご挨拶と、此の剣を還してもらいに来たのですよ。貴方と戦うつもりは無い。」

彼は踵を返し、階段を下りていく。そしてふと、思い出したように立ち止って玉座の方を振り返る。

「…麗蘭。新たな光龍は…確かそういいましたね。成長すれば、さぞや美しい女帝となりましょう。」

「…何を企んでいる？」

「…笑止。私の願いは昔と変わらぬ…兄上も…ご存じのはずだ。」

そう言って、再び闇に消えていく。あとに残るは、黒龍が作り出した死の静寂と瑞奘のみ。

聖龍は大きく息をついた。そして、既に意味を成さなくなった懐かしい名前を口に出す。

「鵺…」

邂逅《5》（後書き）

作者的には気に入っているシーンです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4162ba/

荒国に蘭

2012年1月11日23時52分発行